

平成27年度 シンビオ社会研究会・黄檗会共催 東京講演会

日時：平成27年12月12日（土）15時～16時50分

場所：京都大学東京オフィス（東京都品川区）

参加者数：30名

演題：「IECにおける国際標準化活動」

講演者：野村淳二氏（IEC会長・パナソニック顧問）

司会：成松 洋氏（Global Consulting & Development Japan 会長・当会理事）

【講演会報告】

平成27年12月19日 成松 洋

平成27年12月12日（土曜日）午後3時より  
東京品川の京都大学東京オフィスにて、現IEC  
会長・パナソニック顧問の野村淳二氏を講師に  
迎えて、「シンビオ社会研究会・黄檗会共催 講演  
会」が開催された。聴講者は30名。会場の  
大きさも含め講師との一体感が形成された講演  
会であった。講演者のご厚意で当日使用された  
資料を添付するので、参照して頂きたい。なお  
この資料の無断2次使用は、固く厳禁する。



野村淳二氏

以前から野村氏との交流があった吉川会長および司会者から、講師の紹介がなされた。野村氏は2011年よりIECの評議会委員を務められ、その実績および日本の産業界からの強い支持を得て2014年IEC会長となった。任期は3年である。

まずIECの立ち位置の説明があった。産業の健全な発展の支援を目的とした国際標準化のための規格を作る機関の中で、IECは、担当分野が無線・電気通信であるITUの領域以外の電気・電子およびその関連技術について特に「安全」に的を絞った標準化を推進している。そしてISOは通信・電気・電子関連以外の分野が担当領域である。ただ近年は、例えば自動車等による移動を伴う通信や情報制御などIEC・ITUあるいはISOが相互に関連するような分野が増えており、スイスでのそれぞれの本部が互いに近いことも利用して、定期的にトップの共同会合が持たれているとの事であった。IECでの実務作業を担当する構成員のバックグラウンドは、基本的には標準に関連をもつ企業在籍者である。

特に最近では技術進歩が早いため、標準策定に時間が掛かると時代遅れになることが懸念される。市場からの標準化要請案件のバックログは常に 50~100 ほどもあるとの事で、野村会長になってからはテクニカルコミッティーでの標準化作業は 1 年、長くても 3 年を目標にするように指導しているそうだが、以前は 7 年などと時代に即さない時間感覚のケースも見られた。また、各種「白書」が作られるが単に分厚いばかりで中味の無い無駄遣いをしないよう、役立つ白書を作るように指導方針を定めたとの話もあった。

添付資料には含まれていないが、各国から IEC 活動に参加しているエキスパートの数では、日本はドイツに次いで 2 番目のポジションにあり、それに米国・中国が続いている。すなわち、日本の企業も IEC 活動にかなり積極的に関与しており運営組織の中でも存在感を出している。近年では、やはり中国のエキスパート数の増加が目立っているとのこと。

過去には「安全性」は部品（部材）レベルでの議論がなされたが、近年ではそれだけでは運用時の安全が担保できなくなりつつあるので、部品からシステムそして商品レベルの規格にしていこうとしている。システムアプローチの取り組みについては添付資料を参照されたい。

前述のように、IEC は「安全」に焦点を置き標準化を推進しているので、安全に関する規格が 2 つ以上あるのは矛盾するという意味で、複数案を併記することはない。最後はそれぞれ 1 票ずつ持った国々の投票によって規格が決定される。実際面では、既に自国で先行している基準が国際標準になれば有利に働くので、新興のアジア諸国では結束して或る案を支持するような動きをすることもある。一方、ヨーロッパでは、地域規格である CENELEC が時間を経て IEC 等の国際規格に格上げされるケースも多かったが、最近ではその時間の短縮のため当初から IEC 規格として策定作業を始めるケースも多くなっているとのこと。

IEC の今後の活動として重点を置くポイントは多いが、新興市場・地域との連携や新規オフィスの設置、啓蒙のための教育活動、市場ニーズへの対応のための産業界との連携、標準化の時間の一層の短縮などが挙げられた。また、標準の策定はその適合性の評価（認証）手段の確立と一対となって初めて運用可能となるということで、この両者を車の両輪に例えての話があった。

講演は 1 時間弱で予定部分が終了し質疑応答に 40 分以上が充てられたが、活発かつぎっくばらんな質疑応答がなされた。懇親会の時間が迫ったため、不足の部分は懇親会で補うということで、講演の部は終了した。

質問の中での主なものを挙げる。

近年は IOT などネットワーク上のセキュリティ・安全が問題になる事例が多くなり、IEC としてもその対応が急務である。MTOM（機械と機械間の通信）などの安全性の規格化も IEC の領分とのことでコミッティー活動をしている。

IEC の運営は参加各国の拠出金によってなされ（日本では経済産業省の予算）、各委員の交通費・滞在費等は所属企業の負担とのこと。

日本は参加委員の数が多いが、その分、積極的な役割も果たしており、単に情報収集のための参加ではないとの説明があった。

世界の多くの委員が活動に参加しているが、実際に集まったのミーティングと電子メール等によるやり取りを併用しながら活動を進めている。

予定通り 5 時から懇親会が永里理事の乾杯挨拶により開始された。野村講師は大阪に帰られるため 6 時に退席されたが、その間、講師とのあるいは会員同士での名刺交換・意見交換など活発に行われて、6 時半の終了まで盛況な懇親会となった。懇親会での受講者のコメントで、「普段はなかなか聞けない Global な標準化の世界の話を知ることができて、面白く、ためになった。」「会長をはじめ、思っていたよりも日本の委員の皆さんが頑張っておられる実情を知ることができて、良かった。」などの声があった。

以上



講演風景



参加者全体写真